

# 「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



中川 幸作さん  
昭和4年7月30日生まれ。  
東士狩在住

## 私の生い立ちと

### 中川家の由来

**私** は昭和4年7月30日に中川家の七男として生まれました。

中川家は約300年前に富山県で初代次兵衛が分家し、明治30年、4代目次兵衛が73歳、長男磯次郎34歳、その子どもで私の父である次吉が15歳のときに家族6人で東士狩に入植しました。私は8代目、孫の昇大でちょうど10代目になります。5代目と6代目がそれぞれ3軒ずつ分家し、東士狩と万年地域にいます。

## 江波<sup>よなみ</sup>団体と

### 北海道開拓の夢

**先** 祖が入植した東士狩地域には、明治30年に富

山県の江波<sup>よなみ</sup>から23戸が団体移住し、うち7〜8戸の子孫が現在もこの地に住んでいます。

富山での磯次郎は、左官屋との兼業で水田3反を細々と営む小作農でした。

「北海道で開拓すれば5町歩（1万5千坪）の土地が手に入る。地主になって歳を建てたい」そんな夢を抱いて渡ったそうです。毎日必死に土地を切り開き、一時は手広く耕作していましたが、戦後の農地改革で多くの小作人と土地を分け合うことになりました。

## 開拓の歩みで

### 心に残ったこと

治42年に中音更地域（現在の東士狩地域の一部分）が十勝種馬所用地として買い上げられ、そこにいた6〜7戸の農家が代替地の下鹿追に移転しました。しかし数年後、その土地には他の人が入植していました。不思議なことでした。

大正12年、国の造田計画で土功組合をつくり、水田耕作が始まりました。しかし、砂地が多く水持ちが悪いこの地

は水田に適さず、負債だけが残りしました。

また、この地域には中小河川があり、然別川やパンケチン川の決壊により、幾たびか大洪水がありました。然別川は昭和56年の台風による大災害を受け、大改修が行われています。昭和22年に初めて電気がついたことなど、これらは印象に残る出来事でした。

## 東士狩神社と獅子舞

**地** 域にある東士狩神社は、明治32年に故郷の江波

からご神体を迎えて造営されました。昭和15年には伊勢神宮の廃材で神殿を造り、以後祭典の時には扉を開いています。

また、明治35年には江波から「獅子舞」を呼び寄せ神社に奉納しました。このことが縁で、江波との交流は今も続いています。

## 戦時中の体験

**私** たちの年代は志願兵として兵役を志願できる

最後の世代でした。東士狩地域からは40人が兵役に参加し、



生涯学習センター内に再現された大正初期に建てられた中川氏旧宅

その内7人が亡くなっています。当時は出征された家庭へ小学生も農作業の手伝いに行きました。昭和20年7月には音更空襲があり、3人が犠牲になっていきます。この事実は絶対に忘れてはいけなことで、平和を守っていくことは大事なことだと思います。

## 開拓120年を 迎える地域として

**来** 年は開拓120年の節目を迎えます。長い歴史の中では、楽しい事やつらい事、いろいろな出来事があったと思います。東士狩に生きてきた者として、先人の労苦を忘れず、後継者がこの地で農業を守り続けてほしい願うことはそればかりです。